

省の下に、息の通はん限りはと本化的自覺の下に脊に負ふ重き任務を果すべく自他向上に務むべきあり。

宗祖の御生涯

鈴木順曉

無始無終なる法華經の神靈が、無始無終を國體とせる我が國へ出現せんと地下に潛み、時の來たるを待ち居給ひしなり。折しも如來の金言『不違言訟鬪諍白法隱沒』の世とはあれり、嗚呼『言訟鬪諍白法隱沒』果せる哉、國史上より云はんに、一天萬乘の大君を中心とし、源平二氏の争ふあり二氏漸く衰ふるや最後に北條氏興り、承久の大亂に於て、畏くも三上皇を流し、一帝を廢し奉るが如く暴虐其の極に達せり。次に佛教界上より述べんに、彼の傳教大師の開基迹門たれど法華經の山ありし叡山も、惜しいかな慈覺、安然、惠心等の爲め、蝙蝠宗となり、加ふるに園城寺奈良の社寺間

とに於て遂に言訟鬪諍の實を顯じ、下りて淨土、禪眞等の邪宗續々流布し、哀れ法華經乃ち一大白法は隱沒せられたり。

所謂法華經の神靈が世に出現し、邪宗邪法を掃蕩し、朝廷の神聖を長へに安泰せしめん時は來れり。是に於てか貞應元年二月十六日安房の國小湊の浦に、奇異瑞想に依り孤々の聲を擧げし一男子こそ、末法五濁の暗を照し本化上行の再誕、法華經の權化たる宗祖日蓮大菩薩たりき。

上人の因位は法華經の神靈にして、又出現の因縁は是の如し。故に弘教に先立ち大廟を參拜し、弘教に入りては盛んに大義名分を説き、順逆の大道を明かにし、北條一族を諫曉し、蒙古襲來を豫知し、是が警備を幕府に迫る等、徹頭徹尾我が國體を擁護し給ひしなり。

然るに其の行動公明正大なれが故、惡鬼邪神は直ちに之が妨害に着手せり。初説法の時忽ち東條景信あり、鎌倉弘教に良觀あり、内管領平の左衛門の幕府の暴威を笠にし法身に迫るあり、其の他

虎の威を假る孤共絶わす御身に付き纏ひしは寧ろ
數の内にはあらざりしならん。

かくの如くされば、流石の上人も弘教に先立ち
大廟を參拜し給ひたる所以、又我が國と法華經と
兩個一体ある所以を朝廷に奏聞し給ふ御暇なかり
き、尤も當身延山に籠らせ給へし後九ヶ年は外面
は御暇有りしが如く窺はれたれど、此の時は蒙古
退治に盡し給はざる可からず、依つて御暇おかり
き。按じ給ひ蒙古襲來は文永十一年十月、宗祖漸
く當山の雨露を凌ぐ可き御庵室に打ち着かせ給ひ
し時ありき。又蒙古襲來の終に弘安四年にして上
人の滅を示させ給へる前年の事なりき。されど御
暇無しとて之を放棄し給はゞ出現の理由行動の所
以も無意味に終らん。是故上人は之を以て出世の
恨事とし、常に悲しみ給ひし也。時は今や國難は
掃蕩せられたれば早入滅の時は來れり。今後西上
し此の事行ひ給ふ事難し、此處に於て法孫經一磨
をして御遺託となりしなり。

頃は弘安五年十月十三日曉方、六老僧初め多く

の法弟信徒に包まれ、玲瓏たる誦經の聲の中、從
容として永き眠に入りにけり。大上人の御生涯は
實に正法を以て宗教統一を一大本領とし、粉骨碎
身以て勤王に盡せりと云ふ可し、終りに上人の御
人格を述べれば、上人は膽は頗る大にして、心は
極めて少かりき。折伏を行じ給ふ時は獅子奮迅の
勢にして執權も諸侯も眼中になし、是れ頗る膽の
大なる所あり。攝受を行じ給ふ時は田夫野人も其
の徳に懐く、是れ心の極めて小ある所なり、其の
外に両親を慕ひ給ふ事六十の齡を累ね猶ほ小兒の
如く、師を戀し給ふ事其の死後尙ほ墓に書を懸け
生前を偲び給ひ、義に勇みては四條金吾に代り其
の主君を諫め給ふ。更に慈悲溢れ乘馬に潤ひ、情
意凝りて敵人に及び、弟子を薰育する等終始一貫
三十年一日の如し。

噫宗祖大上人今や入滅し給へりと雖も、其れ而
實不滅度たり。噫而實不滅度たる宗祖哉。